

関係各位

京都府病虫害防除所長
(公 印 省 略)

病虫害発生予察情報について

下記のとおり発表しましたので送付します。

病虫害発生予報第 3 号 (5 月)

予報の概要

作物名	病虫害名	予想発生量 < 平年比 (前年比) >	作物名	病虫害名	予想発生量 < 平年比 (前年比) >
イ ネ	ヒメトビウンカ	多 (多)	チ ャ	チャノホソガ	山城:並(並) 丹波:並(並) 丹後:やや少(少)
	縞葉枯病	並		カンザワハダ	山城:並(少) 丹波: やや多 (やや多) 丹後:並(少)
	イネミズゾウムシ	やや多 (やや多)		クワシロカイ	山城: やや多 (やや多) 丹波: やや多 (並) 丹後: やや多 (並)
ナ シ	黒斑病	多 (並)	カ キ	炭疽病	並(並)
	黒星病	やや多 (やや少)		チ ャ	炭疽病
カ キ	炭疽病	並(並)	野菜類	アブラムシ類	多 (多)
			キャベツ	菌核病	並(並)
			アブラナ科	コナガ	多 (多)
			野菜	ネギ	さび病 ネギハモグリバエ ネギアザミウマ
チ ャ	もち病	山城:並(並) 丹波:並(並) 丹後:並(並)	ネ ギ	さび病	並(並)
	チャノコカク	山城:並(並) 丹波: 多 (やや多) 丹後: 多 (多)		ネギハモグリバエ	並(やや多)
	モンハマキ	山城:並(並) 丹波: 多 (やや多) 丹後: 多 (多)		ネギアザミウマ	やや多 (やや多)

※平年とは過去 10 年の平均である。

目 次

予報の概要	1
予報本文	2
今後注意すべきその他の病虫害等	11
参考	
I 近畿地方の気象の 1 か月予報	13
II 用語の定義	13
III 予報本文の見方	14

農作物病虫害情報サービス
ホームページ
<https://www.pref.kyoto.jp/byogai/>



QR コード

※QR コードは株式会社
デンソーウェブの登録商標です

予報本文

イネ

1 ヒメトビウンカと縞葉枯病

予報内容 発生量：ヒメトビウンカ 平年比多い（前年比多い）
縞葉枯病 平年並

予報の根拠

(1) 4月中旬現在、ヒメトビウンカの発生は平年比多い（+）。

項目	本年	平年値
虫数(匹)	0.7	0.1
確認ほ場率(%)	23.5	8.4

* 虫数は、20回振りすくい取り調査。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) ヒメトビウンカは、イネ科雑草で越冬するため、前年の発生状況等が翌年の発生に影響する。
- (2) 縞葉枯病は、ヒメトビウンカにより媒介され経卵伝染する。

2 イネミスゾウムシ

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

(1) 前年の新成虫の予察灯への誘殺数は、京田辺市及び京丹後市では平年並、亀岡市では平年比多い（+）。

地域	7月1半旬～8月6半旬の誘殺数(匹)	
	令和5年	平年値
京田辺市	38	53.0
亀岡市	415	209.3
京丹後市	50	50.9

(2) 向こう1か月の気温は平年比高く（+）、降水量は太平洋側で平年比多く、日本海側で平年並、日照時間は太平洋側で平年比少なく、日本海側で平年並か少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 前年の新成虫が越冬し、田植え後、水田に侵入して葉を食害する。5月中下旬から卵を産む。
- (2) ふ化した幼虫は、土中で根を食害する。
- (3) イネが根腐れするような水田では幼虫の被害が出やすいので、深水を避け、根を健全に保つ。
- (4) 浅水管理は成虫の産卵行動を阻害し、産卵場所を制限する効果がある。
- (5) 粒剤の育苗箱施用の効果が高い。なお、イネドロオイムシの常発地では、この方法でイネドロオイムシも合わせて防除ができる。
- (6) 育苗箱施用をしなかった場合や田植え後発生が多く、成虫が株当たり0.3頭を越える場合は、そのまま放置すると経済的被害が発生する。

※今後注意すべきその他の病害虫等はp.11を参照

果樹

1 ナシ 黒斑病

予報内容 発生量：平年比多い（前年並）

予報の根拠

- (1) 冬季に剪定した徒長枝での発生は平年比多い（+）。

項目	本年	平年値
罹病枝率（%）	62.4	22.5

- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は太平洋側で平年比多く、日本海側で平年並、日照時間は太平洋側で平年比少なく、日本海側で平年並か少ないと予想されている（+）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 二十世紀は本病に特異的に弱い品種である。
(2) 果実での発病を抑えるために小袋掛け前に、病斑のある果実は摘果し、薬剤防除を徹底する。また、葉での発病が最盛期となる梅雨期の薬剤防除も重要である。
(3) 高温多湿時に多発する。

詳細は、令和6年4月24日付け「防除所ニュース第3号」

http://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/news2024_03.pdf

を参照のこと。

2 ナシ 黒星病

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや少ない）

予報の根拠

- (1) 前年10月の発生は平年比多い（+）。

項目	前年10月	平年値
発病葉率（%）	7.0	2.6

- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は太平洋側で平年比多く、日本海側で平年並、日照時間は太平洋側で平年比少なく、日本海側で平年並か少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 春先、芽基部の病斑で形成された分生子が飛散し、主に葉では葉柄や中肋で、幼果では果面や果梗で発病する。また、落葉上に形成された偽子のう殻内の子のう胞子も重要な感染源となる。
(2) 芽基部に病斑が生じた果そうは、切り取り処分する。
(3) 前年秋の発生が多いと、翌春の発生が多くなる傾向がある。春季の降雨が多い年も発生が多くなる。

3 カキ 炭疽病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 前年10月は発生を認めていない（平年並）。

項目	前年	平年値
被害果率（%）	0.0	0.7

- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は太平洋側で平年比多く、日本海側で平年並、日照時間は太平洋側で平年比少なく、日本海側で平年並か少ないと予想されている（+）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 主として枝の病斑で越冬し、新梢や果実への伝染源となる。

(2) 新梢の発病が多いと果実の発病が多くなるので、発病を認めた新梢は速やかに切り取り、園外の土中に埋める等処分する。

(3) 5～6月に降雨が多いと、新梢や幼果の発病が増える。

※今後注意すべきその他の病虫害等はp.12を参照

チャ

1 炭疽病

予報内容 発生量：山城 平年並 (前年比やや多い)
丹波 平年比多い (前年比多い)
丹後 平年比多い (前年比多い)

予報の根拠

(1) 4月中旬現在の発生量は山城では発生を認めず(平年比少なく(-))、丹波及び丹後では平年比多い(+)

地域	項目	本年	平年値
山城	発病葉数(枚/m ²)	0.0	4.9
	発生ほ場率(%)	0.0	52.0
丹波	発病葉数(枚/m ²)	32.0	5.4
	発生ほ場率(%)	83.3	40.0
丹後	発病葉数(枚/m ²)	73.3	5.0
	発生ほ場率(%)	100.0	42.5

(2) 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量は太平洋側で平年比多く(+)、日本海側で平年並、日照時間は太平洋側で平年比少なく、日本海側で平年並か少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 近年、一番茶後半期に発生がみられる。伝染源は、摘採されずに残った前茶期の病葉である。
- (2) 本病が感染するのは新葉に限られ、新芽生育期に降雨が続くと発生が多くなる。
- (3) 防除は萌芽期以降の被覆前に行う。

2 もち病

予報内容 発生量：山城 平年並 (前年並)
丹波 平年並 (前年並)
丹後 平年並 (前年並)

予報の根拠

(1) 令和5年10月は、山城、丹波及び丹後で発生を認めていない(平年並)。

地域	項目	前年10月	平年値
山城	発病葉数(枚/m ²)	0.0	1.9
	発生ほ場率(%)	0.0	4.5
丹波	発病葉数(枚/m ²)	0.0	1.7
	発生ほ場率(%)	0.0	11.7
丹後	発病葉数(枚/m ²)	0.0	0.0
	発生ほ場率(%)	0.0	0.0

(2) 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量は太平洋側で平年比多く(+)、日本海側で平年並、日照時間は太平洋側で平年比少なく(+)、日本海側で平年並か少ない(+と)予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 越冬芽に付着した胞子が発芽し、新芽の生育につれて若葉に感染する。

- (2) 新葉および新鞘に発生し、被害が発生した新芽を製茶した場合、品質が著しく低下する。そのため、被害を認めた場合は部分摘採などを行う。
- (3) 雨が多く、じめじめした天候が続くと多発する。また、窒素肥料の過剰施用により発生が多くなる。
- (4) 近年、一番茶後半期に発生がみられる。 昨年多発した園では注意する。
- (5) 防除適期は萌芽～1葉期である。

3 チャノコカクモンハマキ

予報内容	発生量：山城	平年並	(前年並)
	丹波	平年比多い	(前年比やや多い)
	丹後	平年比多い	(前年比多い)

予報の根拠

- (1) 4月中旬現在、発生量は山城で平年並、丹波では平年比やや多く(+) 丹後では平年比多い(+)

地域	項目	本年	平年値
山城	綴葉数(㎡当たり)	0.2	0.5
	幼虫数(㎡当たり)	0.0	0.1
	発生ほ場率(%)	5.3	9.5
丹波	綴葉数(㎡当たり)	1.8	0.2
	幼虫数(㎡当たり)	0.0	0.0
	発生ほ場率(%)	33.3	11.7
丹後	綴葉数(㎡当たり)	0.8	0.0
	幼虫数(㎡当たり)	0.5	0.0
	発生ほ場率(%)	75.0	0.0

- (2) 4月第3半旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は宇治市及び綾部市で平年並、京丹後市で例年比やや多い(+)
- (3) 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量は太平洋側で平年比多く(-)、日本海側で平年並、日照時間は太平洋側で平年比少なく、日本海側で平年並か少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 幼虫で越冬し、春に羽化した成虫が発生源となるので、前年秋に多発した園では注意が必要である。
- (2) 通常、第1回目のふ化期は5月末～6月初めで、4回世代を繰り返す。
- (3) ふ化した幼虫は成長すると、葉を綴って食害するようになり、薬剤が掛かりにくくなるので、ふ化直後の若齢幼虫期の防除が効果的である。
- (4) ジアミド系及び IGR 剤などの薬剤に対する感受性が低下している地域があるので、これらの薬剤の効果が低いと感じられる場合は、同系統薬剤の連用を避ける。

4 チャノホソガ

予報内容	発生量：山城	平年並	(前年並)
	丹波	平年並	(前年並)
	丹後	平年比やや少ない	(前年比少ない)

予報の根拠

- (1) 前年10月の発生量は山城で平年比やや少なく(-)、丹波では少なく(-) 丹後では例年比やや少ない(-)

地域	項目	前年10月	平年値（例年値）
山城	寄生芽率（％）	5.4	5.4
	巻葉数（㎡当たり）	5.6	3.6
	発生ほ場率（％）	66.7	37.6
丹波	寄生芽率（％）	7.2	10.9
	巻葉数（㎡当たり）	1.2	1.8
	発生ほ場率（％）	100.0	65.0
丹後	寄生芽率（％）	2.0	（6.2）
	巻葉数（㎡当たり）	0.0	（2.3）
	発生ほ場率（％）	33.3	（50.0）

- （２）４月第３半旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は宇治市では平年比やや少なく（－）、綾部市では平年比少なく（－）、京丹後市では例年比やや少ない（－）。

場所	項目	本年	平年（例年）値
宇治市	誘殺数（頭）	149.5	392.2
綾部市	誘殺数（頭）	38.6	680.9
京丹後市	誘殺数（頭）	53.4	（232.2）

※誘殺数（頭）：４月第１半旬～４月第３半旬計

- （３）向こう１か月の気温は平年比高く（＋）、降水量は太平洋側で平年比多く（－）、日本海側で平年並、日照時間は太平洋側で平年比少なく、日本海側で平年並か少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）蛹で越冬後新芽に産卵する。気温が高いと発生が早くなる。
- （２）ふ化した幼虫は新葉裏面の表皮下に食入し、成長すると葉を三角形に巻く。
- （３）秋整枝をしなかった園や自然仕立て園では発生しやすい。
- （４）巻葉内に堆積した虫糞により製茶品質が低下するので、**摘採近くになって巻葉を生じた場合は速やかに摘採する。**なお、摘採が遅くなる園では、幼虫の発生に十分注意する。

5 カンザワハダニ

予報内容	発生量：山城	平年並	（前年比少ない）
	丹波	平年比やや多い	（前年比やや多い）
	丹後	平年並	（前年比少ない）

予報の根拠

- （１）４月中旬現在、発生量は山城で平年比やや少なく（－）、丹波で平年比やや多く（＋）、丹後で発生を認めていない（平年並）。

地域	項目	本年	平年値
山城	寄生葉率（％）	0.3	0.7
	寄生虫数（100葉当たり）	0.5	5.1
	発生ほ場率（％）	4.8	17.3
丹波	寄生葉率（％）	0.3	0.1
	寄生虫数（100葉当たり）	0.7	0.3
	発生ほ場率（％）	16.7	5.0
丹後	寄生葉率（％）	0.0	0.8
	寄生虫数（100葉当たり）	0.0	7.5
	発生ほ場率（％）	0.0	15.8

- （２）向こう１か月の気温は平年比高く（＋）、降水量は太平洋側で平年比多く

(一)、日本海側で平年並、日照時間は太平洋側で平年比少なく、日本海側で平年並か少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 一番茶芽が霜害を受けると、残った健全芽が集中的に加害を受け、著しい被害となるので、防除を徹底する。
- (2) 気温が上昇し、暖かい晴れた日が続くと、急速に増殖する。

6 クワシロカイガラムシ

予報内容	発生量：山城	平年比やや多い（前年比やや多い）
	丹波	平年比やや多い（前年並）
	丹後	平年比やや多い（前年並）

予報の根拠

- (1) 4月中旬現在、発生量は山城で平年比やや多く（+）、丹波及び丹後で平年並。

地域	項目	本年	平年値
山城	寄生株率（%）	10.7	10.4
	発生ほ場率（%）	61.9	47.6
丹波	寄生株率（%）	4.2	12.2
	発生ほ場率（%）	16.7	51.7
丹後	寄生株率（%）	17.5	22.8
	発生ほ場率（%）	75.0	66.7

- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く（+）、降水量は太平洋側で平年比多く（-）、日本海側で平年並、日照時間は太平洋側で平年比少なく、日本海側で平年並か少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 年間3回（一部山間部では2回）発生する。ふ化直後の1齢幼虫は、ロウ物質で覆われておらず、移動することができる。また、5月下旬頃の第1回目の幼虫ふ化期が比較的揃っているので、この時期のふ化幼虫を対象とする防除は一年中で最も効果的である。
- (2) 発生は園により差があるので、毎年発生し前年に適期防除できなかった園では注意する。なお、標高の高いところでは、ふ化が10日程度遅れる。
- (3) 多発している園も認められるので園を見回り、発生の多い園では注意する。
- (4) 寄生が著しい茶園では、一番茶摘採後すみやかに中切り、深刈りを実施し樹勢の回復を図る。

野菜

1 野菜類 アブラムシ類

予報内容	発生量：平年比多い（前年比多い）
------	------------------

予報の根拠

- (1) 4月中旬現在の発生量は、トマト（施設）では発生を認めず（平年並）、キャベツでは平年比やや多く（+）、ネギでは平年比多い（+）。

作物	項目	本年	平年値
トマト(施設)	寄生株率（%）	0.0	0.5
	発生ほ場率（%）	0.0	7.5
キャベツ	寄生株率（%）	26.7	11.1
	発生ほ場率（%）	100.0	72.5
ネギ	寄生株率（%）	7.3	1.3
	発生ほ場率（%）	66.7	15.2

(2) 4月第3半旬現在、黄色水盤への誘殺数は平年比多い(+)

項目	本年	平年値
黄色水盤誘殺数(頭)	73.0	11.3

*誘殺数(頭):4月第1半旬~第3半旬の合計値

(3) 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量は太平洋側で平年比多く(-)、日本海側で平年並、日照時間は太平洋側で平年比少なく、日本海側で平年並か少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 通常、無翅虫が集団で作物を加害するが、密度が高まると有翅虫が現れて分散し、発生が拡大する。
- (2) は種または定植する際には、寒冷紗被覆やシルバーマルチやシルバーテープ等により有翅虫の飛来を防止する。
- (3) アブラムシ類には直接吸汁加害するだけでなく、ウイルスを媒介するものもある。

2 キャベツ 菌核病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

(1) 4月中旬現在、発生を認めていない（平年並）。

項目	本年	平年値
発病株率(%)	0.0	0.1
発生ほ場率(%)	0.0	3.7

(2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は太平洋側で平年比多く、日本海側で平年並、日照時間は太平洋側で平年比少なく、日本海側で平年並か少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 春に発生が多く、適温は20℃前後、曇雨天が続いた時に発生しやすい。
- (2) 発生終期に形成された菌核は土中に落ち、次作以降の伝染源となる。菌核は土壌中で2~3年間生存可能である。
- (3) 発病株は菌核を形成する前に抜き取り、土中に深く埋めるなど処分する。

3 アブラナ科野菜 コナガ

予報内容 発生量：平年比多い（前年比多い）

予報の根拠

(1) 4月中旬現在、キャベツでの発生量は平年比やや多い(+)

作物	項目	本年	平年値
キャベツ	幼虫・蛹数(／10株)	0.7	0.7
	寄生株率(%)	4.0	4.9
	発生ほ場率(%)	33.3	30.7

(2) 4月第3半旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は京田辺市で例年比やや多く、亀岡市で平年並、京丹後市で例年並(+)

場所	項目	本年	平年値(例年値)
京田辺市	誘殺数(頭)	2.7	(2.1)
亀岡市	誘殺数(頭)	5.9	4.6
京丹後市	誘殺数(頭)	19.2	(19.1)

※誘殺数(頭)は4月第1半旬~第3半旬の合計値

(3) 4月第3半旬現在、予察灯60Wへの誘殺数は京田辺市で平年並、亀岡市及び京丹後市で平年比多い(+)

場所	項目	本年	平年値
京田辺市	誘殺数(頭)	1	1.0
亀岡市	誘殺数(頭)	4	0.2
京丹後市	誘殺数(頭)	6	0.5

※ 誘殺数(頭)は4月第1半旬～第3半旬の合計値

- (4) 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量は太平洋側で平年比多く(－)、日本海側で平年並、日照時間は太平洋側で平年比少なく、日本海側で平年並か少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 高温、乾燥が続くと発生が多くなりやすく、雨が多いと発生が抑制される傾向がある。
- (2) 年間の発生回数が多く、各発育段階(卵、幼虫、蛹、成虫)が混在する。
- (3) 防虫ネット等を利用し、物理的防除に努める。

4 ネギ さび病

予報内容 発生量：平年並(前年並)

予報の根拠

- (1) 4月中旬現在、小株及び大株で発生を認めていない(平年並)。

株の種類*	項目	本年	平年値
小株	発生株率(%)	0.0	0.4
	発生ほ場率(%)	0.0	2.0
大株	発生株率(%)	0.0	2.2
	発生ほ場率(%)	0.0	6.0

*小株:葉長40cm未満、大株:葉長40cm以上

- (2) 前年の秋季に発生を認めていない(平年並)。
- (3) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は太平洋側で平年比多く、日本海側で平年並、日照時間は太平洋側で平年比少なく、日本海側で平年並か少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 春季と秋季に比較的低温で降雨が多いと多発する傾向がある。また、前年の秋に多発して、冬が温暖多雨に経過すると、春に多発する。
- (2) 肥切れや窒素肥料のやり過ぎは発生を助長するので、適正な肥培管理に努める。
- (3) 被害葉は伝染源となるので、ほ場周辺に放置せず、適切に処分する。

5 ネギ ネギハモグリバエ

予報内容 発生量：平年並(前年比やや多い)

予報の根拠

- (1) 4月中旬現在、小株及び大株で発生を認めていない(平年並、例年並)。

株の種類*	項目	本年	平年値(例年値)
小株	被害株率(%)	0.0	2.5
	発生ほ場率(%)	0.0	19.3
大株	被害株率(%)	0.0	(0.5)
	発生ほ場率(%)	0.0	(10.7)

*小株:葉長40cm未満、大株:葉長40cm以上

- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量は太平洋側で平年比多く(－)、日本海側で平年並、日照時間は太平洋側で平年比少なく、日本海側で平年並か少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 幼虫が葉肉部分を加害し、白い筋状の食害痕を残す。
- (2) 被害葉及び収穫残さが本種の発生源となるので、残さは一箇所にまとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。
- (3) 1葉あたり1～数匹の幼虫が加害するバイオタイプA（従来系統）とは異なり、10匹以上の幼虫で集中的に加害し、葉を白化させるバイオタイプB（別系統）の発生を確認しているので注意する。

詳細は平成31年3月13日付け「発生予察特殊報第1号」を参照。

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/tokusyu201803_1.pdf

6 ネギ ネギアザミウマ

予報内容 発生量： 平年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

- (1) 4月中旬現在の発生量は、小株で平年並、大株で例年比やや少ない（－）。

株の種類*	項目	本年	平年値(例年値)
小株	被害株率(%)	32.7	42.3
	発生ほ場率(%)	83.3	88.5
大株	被害株率(%)	37.3	(49.7)
	発生ほ場率(%)	100.0	(85.1)

*小株：葉長40cm未満、大株：葉長40cm以上

- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く（＋）、降水量は太平洋側で平年比多く（－）、日本海側で平年並、日照時間は太平洋側で平年比少なく、日本海側で平年並か少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 年間、10世代以上くり返し、葉の表層を食害し、かすり状の食害痕を残す。ネギでは葉鞘分岐部や葉折れの内側に多く寄生する。
- (2) 本種は、ネギえそ条斑病の原因となるアイリス黄斑ウイルス（Iris yellow spot virus：IYSV）を媒介する。
- (3) 薬剤散布の他、赤色系防虫ネットやUVカットフィルムによる物理的防除が効果的である。
- (4) 被害葉及び収穫残さが本虫の発生源となるので、残さは一箇所にまとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。
- (5) 殺虫剤散布後は効果を十分に確認し、感受性の低下が疑われる場合は系統の異なる薬剤をローテーション散布する。

詳細は下記の資料を参照。

技術資料「ネギアザミウマに対する薬剤殺虫効果（2021年）」

<https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/negiazamiukanjyusei2021.pdf>

技術資料「ネギえそ条斑病防除マニュアル」

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/negi_iysv-manual_20200124-forhp.pdf

技術資料「ネギ栽培における赤色系防虫ネット技術マニュアル」

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/negi_redcolor-net_manual.pdf

※今後注意すべきその他の病害虫等はp.12を参照

今後注意すべきその他の病害虫等

発生量を予報していない病害虫について、発生生態及び防除上注意すべき事項を掲載しています。

イネ

1 苗立枯病

- (1) 病原菌の多くは土壌生息菌である。山土や水田土壌等を使用する場合は、床土のpHを4.5～5.0に調整し、は種前に粉剤の床土混和を必ず行う。
- (2) 低温、多湿に経過するとピシウム属菌、高温、多湿（特に出芽時）ではリゾープス属菌による苗立枯病が発生しやすくなる。育苗中の温度管理に注意し、出芽後は10～30℃の範囲で管理する。特に、トンネル育苗では外気の影響を受けやすいので、日中の高温や夜間の低温に注意する。
- (3) 出芽後はこまめに観察し、カビを認めれば直ちに登録のある農薬で防除する。菌の種類により効果のある薬剤が異なるので注意する。

2 もみ枯細菌病（苗腐敗症）

- (1) 病原細菌は種子伝染するため、塩水選ともみ枯細菌病に登録のある農薬を用いた種子消毒を必ず実施する。
- (2) 出芽時の温度は30℃を基準とする。ただし、加温しない育苗は10～30℃の範囲で管理する。
- (3) 発病苗を植付けると本田で腐敗し、欠株となるので、発病した苗箱の苗は使用せず処分する。

3 苗いもち

- (1) 種子伝染がいもち病の主要な伝染経路の一つであるため、健全な種子を用い塩水選と種子消毒を必ず行う。
- (2) 前年の稲わら、もみがらは有力な伝染源となるので、育苗場所の周辺には置かないようにする。

4 種子消毒について

- (1) 温湯消毒を行う場合は必ず乾粒を用い、**処理温度と時間を厳守**するとともに、処理後は速やかに水で冷却し、直ぐに浸種・催芽を行う。また各機種の使用上の注意事項を遵守する。

5 スクミリングガイ

- (1) スクミリングガイは在来のタニシ類などに比べて貝殻が薄く傷つきやすいので、ロータリー耕耘により機械的に貝を破砕し密度を低下させることができる。水田の土が硬くなる水稻収穫後の耕耘が最も殺貝効果が高い。また、土中に潜って越冬するが、その深さは6cm未満が大部分なので、耕耘深度は浅くてよいが、できるだけ土の硬い時期にピッチを小さくして（通常の1/2以下の作業速度が望ましい）いっきに耕耘すると殺貝効果が高くなる。さらに、越冬場所をなくし越冬個体を寒風にさらすため、水路の泥上げを地域全体で行う。
- (2) 苗を移植する前に、**田面を細かく耕うん**し、越冬した大きな貝を殺す。
- (3) 水路からの侵入を防止するため、取水口に9mm目合程度のネットなどを設置する。
- (4) 耕うんや代掻きの時に農業機械がほ場間を移動する場合には、**機械に付着した貝を移動させない**ように、都度洗浄を行う。
- (5) 貝が水稻に被害を及ぼすのは田植え後、約3週間までで、その間、水深を出来るだけ浅く保つ。水深1cm以下が理想であるが、4cm以下に保つと実害があまり出ない（貝の生態を参照）。
- (6) ポイントは圃場の均平である。圃場が凸凹だと深いところの株が食害され、一方、土が水から長時間露出すると除草剤の効き目が劣ってくる。田植え前に圃場の高低を修正することが重要。
- (7) 前年の被害が大きかったほ場に移植する苗には、箱施用剤を使用する。

詳細は、令和3年4月2日付け「防除所ニュース第3号」を参照のこと。

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/news2021_03.pdf

ムギ

1 赤かび病

- (1) 1回目の防除適期は、二条大麦では蒴殻の抽出期(出穂期の14～16日後)、小麦では開花始め(出穂期の4～5日後)から開花期であり、2回目の防除適期は1回目の防除の1週間後である。特に、この時期に赤かび病菌の子のう胞子の形成と飛散を促す気象条件(日最高気温が15℃以上、日最低気温が10℃以上で、湿度80%以上か降雨直後)が重なると、赤かび病に感染するリスクが高くなる。
- (2) 赤かび病菌は人畜に作用性の強いカビ毒をつくるため、予防的な防除が重要である。

2 コムギ黄斑病

- (1) 小麦推奨品種の「せときらら」は本病に弱く、多発すると下葉から枯れ上がる。発生初期に防除を行うか、感染源となる残渣を分解するため水稲との輪作を行う。

果樹

1 ブドウ 灰色かび病

- (1) 発病適温は23℃前後で、開花前に雨曇天が続くと、突発的に発生することがある。
- (2) 開花前からハウス栽培では換気に努め、予防散布を徹底する。
- (3) 果粒に付着した花がらは、速やかに落とす。

野菜

1 ネギ・タマネギ ベと病

- (1) 4月中旬現在、ネギでの発生量はやや多く、タマネギでの発生を確認している。
- (2) 平均気温が15～20℃で降雨が多くなると、病原菌の活動が活発になるので、本病の発生には十分注意する。

詳細は、令和3年4月15日付け「病害虫発生予察注意報第1号」を参照。

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/chuui2021_01.pdf

参 考

I 近畿地方の気象の1か月予報

(4月20日から5月19日までの天候見通し)

令和6年4月18日
大阪管区气象台発表

<予想される向こう1か月の天候>

向こう1か月の気温は、暖かい空気に覆われやすいため高いでしょう。特に、期間の前半はかなり高くなる見込みです。

前線や低気圧の影響を受けやすいため、向こう1か月の降水量は近畿太平洋側が多いでしょう。向こう1か月の日照時間は、近畿日本海側で平年並か少なく、近畿太平洋側で少ないでしょう。

週別の気温は、1週目は高い確率80%、2週目は高い確率70%、3～4週目は高い確率60%です。

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)>

	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気 温	10	10	80
降 水 量			
近畿太平洋側	20	30	50
近畿日本海側	30	30	40
日 照 時 間			
近畿太平洋側	50	30	20
近畿日本海側	40	40	20

病虫害防除所では上記の天候の1か月予報の表現を「向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は太平洋側で平年比多く、日本海側で平年並、日照時間は太平洋側で平年比少なく、日本海側で平年並か少ないと予想されている。」としました。

II 用語の定義

1 半旬のとり方

第1半旬 第2半旬 第3半旬 第4半旬 第5半旬 第6半旬
各月の 1～5日 6～10日 11～15日 16～20日 21～25日 26～最終日

2 発生量――病虫害の発生程度と広がり両面を加味したものをいう。

3 平年値――原則として過去10か年の平均とする。
データが10年に満たない場合は例年値とする。

4 平年値との比較

1) 時期

平年並	平年値を中心として前後2日以内
やや早い	平年値より3～5日早い
やや遅い	平年値より3～5日遅い
早い	平年値より6日以上早い
遅い	平年値より6日以上遅い

2) 量(発生量、発生面積等)

平年並	平年値並の発生で10年間に4回は発生する程度の普通の量
やや多い	「平年並」より発生が多く、10年間に2回程度の頻度で発生する量
やや少ない	「平年並」より発生が少なく、10年間に2回程度の頻度で発生する量
多い	「やや多い」より多く、10年間に1回程度しか発生しない量
少ない	「やや少ない」より少なく、10年間に1回程度しか発生しない量

Ⅲ 予報本文の見方

1 チャノコカクモンハマキ

予報内容 発生量：山城 平年比やや多い（前年比やや多い）
 丹波 平年並（前年並）
 丹後 例年並（前年並）

- ・「予報内容」は、今後の病害虫発生状況や発生時期の予測を平年比で示しています。
- ・平年比の見方は、「Ⅱ 用語の定義、4 平年値との比較」を参照してください。
- ・（ ）内の前年比は予想月の前年の発生量（時期）との比較です。
- ・必要に応じて地域別に示します。

予報の根拠

- （1）前年10月の発生量は、山城、丹波、丹後で平年並の発生。
- （2）4月中旬現在、山城で平年比多く（+）、丹波、丹後で発生を認めていない（平年（例年）並）。

地域	項目	4月の調査結果	4月 平年値
山城	綴葉数(/㎡)	3.0	0.1
	幼虫数(/㎡)	0.5	0.0
	発生ほ場率(%)	22.7	3.7
丹波	綴葉数(/㎡)	0.0	0.5
	幼虫数(/㎡)	0.0	0.0
	発生ほ場率(%)	0.0	11.7
丹後	綴葉数(/㎡)	0.0	0.0
	幼虫数(/㎡)	0.0	0.0
	発生ほ場率(%)	0.0	0.0

- ・「予報の根拠」として直近の巡回調査のデータの中で主だったものを示しています。平年値も記載しているので、防除等の目安としてください。

- （3）4月中旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は、宇治で平年比少ない（-）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （1）幼虫で越冬し、春に羽化した成虫が発生源となるので、前年秋に多発した園では注意する。
- （2）通常、第1回目のふ化期は5月末～6月始めで、4回世代を繰り返す。
- （3）ふ化した幼虫は成長すると、葉を綴って食害するようになり、薬剤がかかりにくくなるので、ふ化直後の若齢幼虫期の防除が効果的である。

- ・「予報の根拠」は、巡回調査の結果、天候、フェロモントラップや予察灯への誘殺状況、指導機関からの情報等、「予報内容」で示した発生量や発生時期の予測の根拠となった事項を記載しています。
- ・文中の（-）、（+）は、予測される発生量に影響を及ぼすと考えられるもので、（-）の場合発生が少なくなると考えられる要因、（+）は発生量が多くなると考えられる要因を示しています。

- ・「発生生態及び防除上注意すべき事項」は、当該病害虫の生態、薬剤防除や耕種的防除方法の留意事項、要防除水準等を示しています。

※病虫害防除については、病虫害防除所・最寄りの農業改良普及センター又は農業協同組合にご相談ください。

詳しい農薬情報は、農林水産省ホームページの「農薬コーナー」の「農薬情報」をご覧ください。

ホームページアドレス http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_info/index.html

農業改良普及センター 電話番号一覧		
・京都乙訓	農業改良普及センター	075-315-2906
・山城北	農業改良普及センター	0774-62-8686
・山城南	農業改良普及センター	0774-72-0237
・南丹	農業改良普及センター	0771-62-0665
・中丹東	農業改良普及センター	0773-42-2255
・中丹西	農業改良普及センター	0773-22-4901
・丹後	農業改良普及センター	0772-62-4308

京都府病虫害防除所

〒621-0806 京都府亀岡市余部町和久成9

TEL 0771-23-9512

FAX 0771-23-6539

－農薬の使用にあたっては使用基準を遵守すること－